

## 表敬方法としての引用・注記

日本語日本文学科 中井 賢一

「研究余滴」のカテゴリーに加えていただくのも憚られ  
そうな小文ではあるが、少しく先行研究の引用と注記の方  
法について、考えるところを述べたい。

先行研究において、学会誌等に掲載された論文が、数年  
後、単行本や論文集に収め直されることは、ままある。前  
者を初出稿、後者を再録稿と呼ぶとして、自分の論文に、  
例えばそのような先行研究を引用しなければならぬ場合、  
初出稿、再録稿のいずれを、引用・注記に用いるべきか。  
無論、紙幅に余裕があつて双方の記載が可能な場合は併記  
すれば良いだろう。しかし、そうでない場合も多く、必然  
的にいずれか一方の記載に留めざるをえないことになる。

このような時、学会による偏差は多少あるが、一般的  
には「再録稿」を用いるはずである。「初出稿」時点から  
の修正がありうるからであり、実際「初出稿」から大きく  
修正の手が加わっているものも多く、その意味では「再録  
稿」を以て引用・注記するこの通例は、後学の便宜のため  
にも妥当だろう。

しかし、では、修正の程度が微細な場合、例えば字句の

訂正程度である場合や、あるいはそれすらもない場合であ  
ればどうか。それでも、この「通例」に従うほうが良いの  
だろうか。

私の旧知のA氏は、自論提出の時期の早さを重視される  
方である。論文の学会での評価というのは、いかに内容が  
秀でたものであるかは勿論、その着想がいかに他者に先ん  
じたものであるかによっても左右される。「時期の早さ」  
にA氏が拘られるのも至極当然と言えよう。そのA氏の御  
論文を引用することになったのだが、当該論文は、「再録  
稿」では、字句の修正と書式の組み直しがあつただけであ  
り、論旨自体の更改は全くない。私は迷つた結果、「初出稿」  
の本文を引用し、また題目等を拙稿末尾に注記させていた  
だいた。「再録稿」よりも、その数年前に公にされた「初  
出稿」を用いる方が、A氏の「着想」の「時期の早さ」に  
敬意を表することになる、と考えたからである。そのほう  
が、A氏の御論の内容のみならず、その「時期の早さ」へ  
の私の感服をも表しうる、と考えたからである。

また、かつてB氏から非常に丁寧な手紙を頂いたことが  
ある。面識が全くなかつたにもかかわらず、私が、不躰に  
も、いきなり拙い論考を送りつけた上、批評を請うたから  
であつたが、身に余る激励とともに、こちらが恐縮するほ  
ど詳細な御教示を下された。B氏がかつて公にされた御論  
文を紹介下さり、拙稿との関連性や次なる展開への発展

性などを、細やかに御教唆下さったのである。私にとって、B氏のその御論文は、文字通り特別なものとなったのだが、近時、これも単行本に収められ、「再録稿」が出た。この「再録稿」も、前の例同様、論旨の更改はない。私は、この時も悩みつつ、やはり「初出稿」を以て、引用・注記させていたでことにした。「再録稿」よりも、B氏に直接紹介いただいた「初出稿」を用いる方が、B氏の丁寧な御教示に敬意を表することになる、と考えたからである。そのほうが、B氏の下さった御教唆を私が受け止めていることを明確に表しうる、と考えたからである。

さて、私が、敢えて「通例」に従わなかった二つの事例を挙げてみた。いずれも、特別な敬意を、引用・注記に籠めようと試みたものである。

そもそも引用・注記される先行研究とは、私たちがその論文を成すに当たり、多くを学んだものばかりであろう。だからこそ、私たちは、学恩に対する謝意と敬意の証として、文言を「引用」し、題目等を「注記」するのであろう。だとすると、もし、それらの中に、自論に特別に重要な位置を占めるものがあるのなら、「引用・注記」の方法に工夫を凝らすことで、「特別な敬意」を表することがあっても良いのではないか。無論、それが後学に迷惑をかけるような独善的なものであってはなるまい。しかし、そうでない範囲のものであるなら、むしろ積極的に認められるべき

と思うのだ。

「文は人なり」と言われるが、論文においても、そこには、論者の学術的知見は勿論、論者の人柄もが、にじみ出ているものなのだろう。それならば、私の書く「文」は、今後とも私の「人」がそのまま籠もったものになりたい、と思うのであるが、いかがであろうか。